

# 令和4年度新宿区生涯学習フェスティバル



## 作品目録



- ◆日時 令和4年9月28日(水) ~ 10月2日(日)  
午前10時~午後5時(最終日は午後2時まで)
- ◆会場 新宿文化センター 地下1階 展示室
- ◆主催 公益財団法人新宿未来創造財団
- ◆共催 新宿区

作 品 一 覧 ( 展 示 順 )

	【 題 名 】		【種 類】	【氏 名】	【活動団体名:活動場所】
1	あじさい燃ゆ		水彩画	中川 富子	
2	シンピジューム		パステル画	関根 五千子	アートフレンド
3	どれから食べる？	奨励賞	水彩色鉛筆	友部 美奈子	
4	せせらぎの里		水彩画	阿部 毅一郎	
5	「サア、お伽の世界へ」	奨励賞	日本画	山賀 美登子	
6	ライン川・河川敷の古城		油彩画	菅井 脩	
7	支え	金賞	水彩画	古賀 晴彦	東京ムツミ会 ファロ
8	風景		油彩画	中嶋 修	
9	庭の柿		油彩画	大竹 久恵	
10	遊ぶココロ～ここにいるよ		油彩画	菅井 なを	
11	初夏の浜離宮恩賜庭園		水彩画	藤井 茂徳	大久保センター きさらぎ会
12	夏の終わり	奨励賞	油彩画	原口 勉	アートフレンド
13	果物	区長賞	油彩画	渡辺 浩志	早稲田アート
14	窓景	奨励賞	油彩画	加瀬 誠一	
15	秋桜		水彩画	花沢 美代子	絢の会
16	釣果		水彩画	屋宮 早苗	絢の会
17	フィレンツェ		紙粘土	吉田 一雄	
18	窓辺		水彩画	乾 佐知子	きさらぎ会
19	猫と私	金賞	日本画	北川 眞智子	
20	赤レンガ庁舎（北海道）		水彩画	宮川 幸子	大久保センター きさらぎ会
21	パラドックス		水彩画	酒井 肇	
22	海		水彩画	山村 琴葉	おえかきほけっと
23	森でみつきたい道		水彩画	小野 夏生	おえかきほけっと
24	希望		水彩画	川波 和希	おえかきほけっと
25	空までとどけ！	銅賞	水彩画	小野 護	おえかきほけっと
26	もう一度会いたい景色	銀賞	水彩画	佐藤 美夢	おえかきほけっと
27	海		水彩画	山村 杏実	おえかきほけっと
28	夕焼け空の夏トマト		アクリル画	安斉 順子	新宿青年教室
29	2本のお花たち		アクリル画	I. K	新宿青年教室
30	お洒落なお皿と一輪挿し		アクリル画	坂本 毅史	新宿青年教室
31	火照った顔をお水につけて	奨励賞	アクリル画	森 敦樹	新宿青年教室
32	白い花瓶と向日葵		アクリル画	遠藤 貴志	新宿青年教室
33	僕の中のこだわり		アクリル画	野原 勉	新宿青年教室
34	食彩の色々		アクリル画	塩谷 剛彦	新宿青年教室

	【 題 名 】		【 種 類 】	【 氏 名 】	【活動団体名:活動場所】
35	北社の秋	銅賞	水彩画	高橋 とく子	アートフレンド
36	小麦	奨励賞	水墨画	若月 千晴	彩苑会
37	下田の龍宮窟	銀賞	水彩画	斎藤 ゆき	アートフレンド
38	Vipsania		アクリル絵の具 その他	藤川 裕子	
39	ヒマワリ娘	奨励賞	水彩画	光中 博美	絢の会
40	寅年2022。	銀賞	油彩画	尾形 静香	
41	萬代橋（新潟市）	奨励賞	色鉛筆	大谷 みち江	アートフレンド
42	ブルージュの広場		水彩画	池田 至	
43	北海道駒ヶ岳		水彩画	石田 雅章	
44	おもいで	銅賞	油彩画	友部 政義	
45	竹林	銅賞	水彩画	大井 邦江	
46	緑のカーテン		水彩画	竹中 弘	
47	一期一会の一個のいちごです。		アクリル絵の具、鉛筆	ノモト ユカリ	
48	パイナップルのある静物	奨励賞	油彩画	竹内 潤子	早稲田アート
49	星を数える	奨励賞	日本画	呉 聖恵	
50	レター秤のある書斎		水彩画	竹内 元章	早稲田アート

## ～ 区 長 賞 選 評 ～

鮮やかな色使いと絵具の塗りかさねの妙が、力強い画面をつくりあげています。特に画面中央のみかんの皮が印象的で、その固さ、むいた時の感触やにおいまで彷彿とさせます。まるでみかんをむく楽しみと、絵具を塗りあげる楽しみが一体となっているようで、生活と制作がとけあった作者の感情がひしひしと伝わってきました。

## ～ 講 評 ～

(審査員 50 音順)

昨年に引き続き、絵画展の審査を担当させていただきました。まだコロナ禍の影響が続き、思う存分絵筆をふるうことのできなかつた方も多いのではないかと推察いたしますが、そんな中でも日々積み重ねた制作の成果を、こうして世に送り出すみなさんの努力と元気に、拍手を贈りたい気持ちでいっぱいです。個人的には「小粒でピリリと辛い」作品が多かったように感じました。

区長賞を受賞された《果物》は、群を抜く迫力で審査員の眼をひきました。柑橘の断面と、むかれたばかりの分厚い皮が、絵具の質感を生かした画面づくりによって、まるで匂いたつようにせまってきました。やはり描きたいもの・ことがはっきりしている絵は強いですね。多視点的な構図も驚くほどはまっていて見事です。金賞の《支え》はまことに不思議な作品で、見れば見るほど謎が深まり、妄想が広がります。画面手前を占めるふたつの樹木のような私たちは、まるでふたりの人間のようにも見えてきますし、背景の灰色の塔？にはドラゴンでも棲んでいそうな雰囲気

で...さて、作者の方はいったいどんな物語をこの絵の中に封じ込めたのだろう...と審査員一同、しばし引き込まれてしまいました。銀賞の《寅年2022。》も素敵なファンタジーの世界ですね。人間とたわむれる動物たちの幸せな情景に、思わず顔がほころびます。たなびく国旗の数々は平和の象徴のようで、あراそいの絶えない現今の闇を、このような豊かなイメージで吹き飛ばしてしまいたいと心から思います。

絵画は作者自身の意思や感情の表れであると同時に、観る人々の自由な解釈によって新しいのちが吹き込まれるものです。このような絵画展に出品なさることで、自作の知られざる側面を発見したり、思いもよらない解釈に出会ったりすることもあるでしょう。それはきっと、今後の制作の糧になるはずで、さまざま解釈をうみだす懐の深い絵画の世界を、これからもぜひ追い求めていただきたいです。

福沢一郎記念館 非常勤嘱託(学芸員) 伊藤 佳之

今年から光栄にも審査に関わらせて頂きました。ジャンルや世代、個別の境遇を超えて集まった作品からは、自由闊達な遊び心と制作に向き合う真摯な姿勢が伝わり、非常に胸を打たれました。どの作品も見れば見るほど発見があり、こちらが試される貴重な時間となりました。

区長賞の『果物』は構図もさることながら、油彩の厚塗りとみかんの皮をむく感触が見事に結実した傑作、視覚のみならず五感を刺激されました。花瓶の模様(ブドウ)？の不思議な浮遊感にも惹かれました。『支え』も水彩の丁寧な塗り重ねと、細い筆による枝の動きが、樹木がダンスをしながら空間を震わせている様で、別種の不思議な魅力があります。『猫と私』には日本画の塗り重ねによる色彩の深みと輪郭のハイライトが、2者のあいだに流れるゆるやかな時間を感じさせてくれます。『寅年2022。』はユーモラスなルックスとは裏腹に、画面が破綻しかねないギリギリのところまで回避している力技に、人間以外の異種との調和として受け取りました。『もう一度会いたい景色』の移ろいゆく朧げな景色を定着させようとする筆触に強く共感しました。大きな画面の油彩による作品も見たいと思いました。『下田の龍宮窟』の下部の白い紙の地を生かしたダイナミックな波から上部の空に霞む木まで、画面全体から自然の持つ荒々しさを感じました。『おもいで』は影の描写が強過ぎるのがありますが、今しか描けないドキュメントとしての絵の勢いがありました。他にも選外にも良い作品がありましたが、紙幅の都合上、ふれることが出来ないのが残念です。

あらためてご応募頂いた皆さまに感謝申し上げます。コロナ禍を経てなお制作を続ける力に鼓舞されました。再び皆さまの作品に出会える日を楽しみにいたしております。

画家 大槻 英世

今年もたくさんの力作を拝見できて、とても嬉しく思いました。思い思いの題材を、それぞれいろいろな画材で描かれた作品群に、作者が絵を描かれる時の気持ち、情景など想像して、深く観入ってしまいます。素直で真っすぐな作品だからと思います。絵を描くことに生活が映っているような、そんなことを思います。その中から、いくつかの作品について、簡単ですが感想を書きたいと思います。

『果物』作品の強さをまず感じました。じっくりと観ていると、いろんな角度からの視点が巧みに込み合わさっていることに気がつき、濃厚な色彩と相まって、目を楽ませさせてくれます。『猫と私』丹念な塗り込みと色の重ねで、暗色にまとめられた画面にたくさんの色の発見があります。横たわる人物を猫が支えるように配した構図も良いと思いました。『星を数える』星雲が広がったような夜空を背景に、たくさんの星、流れ星。地上の焼けるような山のシルエットはドラマチックで、記憶の中の風景みたいです。『萬代橋(新潟市)』斜光の静かな光景が、丁寧な色鉛筆の筆致で描かれていて、ビルの壁の影、水面の描写に惹かれ

ました。『寅年2022。』万国旗からサーカスを連想しましたが、そうでもない。優しい姿の猛獣たち、色使いも独特です。太陽と月が両脇に配されているのに気づくと、宗教画のような気配も感じてきました。『ヒマワリ娘』丹念なタッチで描き込まれていて、少し抑えられた色彩も美しい。遠くまで空気を感じます。『空までとどけ！』はじめは手形だと気がつかなかったのですが、配置も動きもとてもよくて、スタンプにとどまらないアクション絵画が生まれましたね。『もう一度会いたい景色』思い出が、こころの奥で色になって、ゆっくりと現れて来た、遠い空のような絵から、目が離せなくなりました。

日本画家・絵画講師 近藤 鋼一郎

昨年に続き、今回も絵画展の審査に参加させていただき、多彩な作品を拝見できて大変うれしく思います。細部まで手の込んだ緻密な描写の静物画や、元気いっぱい抽象画、爽やかな色彩の風景画など作風は様々ですが、全体的に、皆さんが誠実に絵画に向き合い、丁寧に制作されていることが伝わってきました。

区長賞を受賞された《果物》は、厚みのある油彩画の質感が存分に発揮された、大変存在感のある静物画です。特に中央に描かれた蜜柑を見ると、凹凸のある外皮、柔らかいわた、瑞々しい果肉の感触をリアルに想像させる、生き生きとした表現が特徴的だと思います。斜めに置かれた白いクロス、蜜柑の皮や葉、奥のポットなどを巧みに配置することで、安定感と動的な迫力を併せ持つ構図となっており、優れたテクニックを感じました。金賞の《支え》は、鮮やかな色を巧みに組み合わせることで、二本の樹を微妙な色調で描かれています。横に伸びる樹の枝は腕のようにも思え、奥に見える城、あるいは塔のようなシルエットと周囲の岩山らしき物陰は謎めいており、この作品のもつ不思議な世界観に関心がかき立てられます。《夏の終わり》は洋ナシやイチジクを緻密に描いた作品で、作者の力量が大変よく表れています。果物が画面の中に大きく配置されており、グレーの背景の中に黄みの強い色彩が明瞭に浮かび上がっており、小品ながらも迫力があります。接地面の陰影が強調されていないこともあって、やや不可思議な、夢の中の情景といった趣があり、シュルレアリスムを連想させる点もまた魅力の一つのように感じました。また、手の跡をリズムカルに配置した《空までとどけ！》を見ると、手形と筆致に軽やかな動きがあり、まるで空に向かって元気よくジャンプしたり、背伸びをしたりしているような雰囲気伝わってきます。

応募作品を通して、皆さんのモチーフへの愛情やじっくりと観察する好奇心、そして純粋に描く喜びといった思いに触れて大変感銘を受けました。どうもありがとうございました。

公益財団法人 SOMPO 美術財団

SOMPO 美術館 学芸員 武笠 由以子